

## 人生とさびしさ

### 人生とさびしさ

聖講習会の一夜、「さびしさ」といふことが問題になりました。その時感想を語っておきましたが、それからも考えつづけましたので、書いて見ることに致します。

嬰兒が火のつくほどやかましく泣きます。母が抱いてやれば泣くのをやめます。小学校の児童たちが、

「あおい月夜の浜辺には 親をたづねて鳴く鳥が

波の国から生れ出る 銀の翼の浜千鳥」

と歌っています。歌一ぱいにさびしさがただよっています。人に歌われてゆく歌は、どこか人生にふれたものがあるからである。特に人生のさびしさにふれているからであります。

だが世の中には「人生のさびしきなんて弱々しいことをいうのは嫌いだ。我等は強く生きるのだ」という人がある。果してそれが真の強きなのでありましょうか。そして、そうした態度でほんとうに人生の淋しさが解決づ、けられるでありましょうか。

まことに人が、外面的にばかり生きておって、多忙を続けている間は、さびしきはないかも知れません。しかし、それはほんとうにさびしきが無いのであろうか、あるいはさびしきが無かまぎれているのではあるまいか。

こうした種類の人たちは、よく享樂に走ってゆきます。目と耳と鼻と口と体との享樂が満される時、さびしきはないものようである。こうした人は浅薄に人生を肯定してかかる。

「この世をば我が世とぞ思ふ 望月のかけたることもなしと思へば。」

藤原道長のこの人生の肯定の仕方は、多くの人に求められます。しかし、この態度が一生の間続けられるでありましょうか。こうした言葉は、むしろ華かで幸福でありたいと願っている心のあらわれではあるまいか。享樂的人生肯定者は、そうであるといふよりは、そうありたいと願っているのではありますまいか。確かに常識の世界では、人は皆こうして、人生のさびしきに背をむけて、限りなく享樂的でありたいと希っているのではありますまいか。

### 人の世の真相

しかし人生は、全ての人に、何時までも、淋しさを味わしめないではおきませぬ。シッダルタ太子は、華やかな王宮の榮華の影にひそむ人生の淋しさを凝視せずにはいられなかつた。美姫たちの美しい乱舞の側につきまとう淋しきを見のがすことは出来なかつた。ましてや、人生の生、老、病、死の真相を知る時、生きるということの如何に淋しいことであるかを、どうすることも出来なかつたのであります。

人生には死がある。この自分がやがては死んでゆく……ごま化すことも、さけることも出来ない嚴肅さを以って、淋しきは歩みよって来ます。

恋人同志は、刀葉林地獄の劍の山を登っているのである。一時離れていることにも淋しきがあろう。だが、やがて結婚した時、その淋しきは癒されるか。夫と妻との間

にすら、言いようのないさびしさがわだかまる。愛すれば愛するだけ「言いようのない淋しさ」がつきまといましよう。

生の影には死がひそみ、喜びの側には哀愁が伴い、盛んなるものの裏には衰亡の因をはらむ。勝つてさびしく、敗けてさびしく、笑いの極にさびしさがあり、喜劇の裏にも涙がある。しよせん人生はさびしさである。

## 二種のさびしさ

だいたい人生には二種のさびしさがあると思います。

一、何ものかをもつておきかえることの出来る淋しさ、と

二、何ものをもつてもおきかえることの許されぬ寂しさ、と

前者は、生きること付随したさびしさであり、後者は、人生それ自身のさびしさであります。

子供が死んだ親のさびしさ、夫を失い、妻を失った者のさびしさから、人間大部分の淋しさは、何ものかによつておきかえられそうな淋しさであります。

多くの人は、さびしさを救うとは何ものかをもつてそれにおきかえ、あるいはさびしさを解消することだと考えております。果して、何ものかによつて打ち消したり、おきかえたりすることが本質的な救いでありましょうか。人生の歩み方の別れてゆく重大な問題でなくてはなりません。社会に存在する嫌な享楽機関の大部分が、こうした淋しさの慰安所であるかも知れません。しかし、淋しいが故に他の何ものかを漁つてゆくことは、生きることの大きな墮落ではありますまいか。

## 救い

さびしさをゴマ化さないで、さびしさにたえ忍び、人生の真相に目覚めて、もつと深い世界に歩みを運ぶ者こそ、やがて救われてゆく人でなくてはなりません。淋しさを救うことはさびしさに直面すること以外にはあり得ないからであります。

こうした人は、地上の甲から乙、乙から丙と享乐的なものを漁るかわりに、深い世界を求めてゆきます。この相こそ、求道の態度でなくてはなりません。大胆にさびしさに直面します。そうして人生の真相にわけ入つて、意味を発見し、あきらかに見、やがて道を発見します。

第二のさびしさ、即ち、人生そのもののさびしさは、こうして第一の淋しさを忠実に体験して、それでゆかない人へのみ与えられることでもあります。人生そのものの寂しさは、他の何ものによつておきかえることも出来ないし、又おきかえようとも致しません。人生全体、生きることの全面にただようた寂しさであります。

救いとは、淋しさから、寂しさに歩むことであります。淋しさから、寂しさに歩むことこそ、生存から生活への転回でなくてはなりません。「寂」の天地に呼吸する時、淋しさが、尊い世界への通路であつたことに気づくのであります。

## 寂と浄土

お浄土のことを『涅槃寂靜』と言ったり「寂靜無為の樂」と言います。一切群生の魂の故郷であり、眞実生活者の道の本質であり、唯一、絶対、最高、至純なる彼岸であります。これなくしては我等の生活は考えられないという彼岸であります。全一なる聖それ自身であります。

我等がこの寂靜の天地に通い得るのは、唯、「寂しき」の世界においてだけであります。『寂』の世界こそ、寂靜の彼岸に通う世界であります。

「無量寿如来に帰命し、不可思議光に南無したてまつる。」という信の一念は、淋しさから寂しさに転入して、人生や自己の本質にふれた者にのみおこし得る智慧の世界であります。智慧とは、ありのまゝを見たる寂そのものであります。彼岸から今一度人生をみかへす眼こそ、人生の相を真に知るでありませう。如来なくして、何で自覚があり得よう、智慧は如来それ自身でありつつ、しかも寂の世界に住む者の眼であります。如来の智慧を恵まれること以外に眞実の救いはあり得ない。救われた人、眞の道の人のみ、人生の、我のありのままを見とどけて歩むことが出来るのは、寂の天地を知っているからであります。

### 寂の世界

小さく縄ばりしたやうな世界、善悪がせせこましく角をつきあわせている所、生命の枯れた、思想と思想がかち合っている所、そうした、型の固定、囚われ、はからい、裁き、等々のある所には「寂」の世界はあり得ない。

船一艘見えない大洋の大きなうねり、青く澄んだ深い淵、わけて入る秋の密林、そうした世界を見るやうな、何ものにもこだわらず、固まらず、とらわれず、あるがまゝに生きた世界に「寂」を見る。

釈尊、親鸞聖人、良寛、芭蕉、一茶……：そうした聖者たちの上に、無限にひろがる「寂」を見ます。淵のやうな深さを、大洋のやうな大きさを、夕陽のやうな偉大さと静けさを。

そうしてこれ等の聖者たちの背後に、普遍絶対の如来を、生死動乱を超えたる寂靜の樂を肯定することなくして、その明かなる智慧と、純なる感情と、強き意志とを了解することは出来ません。

如来の眞実なる勅命を聞き、全一なる彼岸への道を発見し、謙虚に眞理の前に合掌して具体的一の世界に呼吸することが出来るのは、唯この寂の天地においてであります。

「心ここにあらざれば、食えどもその味を知らず。」

見て見ず、聞いて聞かず、読んで読み得ないのは、心がかくはないからであります。心が常にここにある——騒々しい時にも、静かな時にも、順境にも、逆境にも、火にも、氷にも、そして全てに、心がここにある。「寂」とは心がここにあることでもあります。

茶道に達した人は、一挙手一投足の中にも、天地の寂を封じこめています。

日本には「もののははれ」という言葉があります。外国の言葉にはこれにあてはまる的確な言葉がないそうであります。普通に言っている「哀れな話」などという時の「悲哀」という意味ではありません。

もののははれを知る心は寂しい心であります。全一なるものの見方をするのであります。人生そのものの寂しさに生きる心であります。ありのままが光っている世界にとけあつた境地であります。智慧と慈愛とにふれるものの相であります。

### 信心歓喜

「聞其名号、信心歓喜」…………… 其の名号を聞いて信心歓喜する。

如来を聞くといふことによつてのみ信心歓喜の世界に生れます。歓喜が信心ではないが、信心には必ず歓喜がともないます。

寂しいといふこと…………… 歓喜といふこと…………… そこに大きな矛盾があるようであります。はたして矛盾でありましょうか。それは決して矛盾ではありません。涅槃の大樂が味われることによつて、生死界は苦であると諦らかに信知するように、信心歓喜は「寂」の中のみあり得るのであります。さびしさを無くすることによつて救いがあるのではなくして、解消うちげすることも、なくすることも出来ない、又、無くしようともしない「寂しさ」こそ、真実の信心歓喜の生きる天地であります。如来の心の顕現する世界であります。

聖人は、信の世界を「歡喜賀慶の心」と言い、「慶大難思の慶心」と言われました。真実に生きる者、如来に生きる者、正法を食物として生きる者によるこびがなくて何4としましょう。然し、それは淋しさを無くしてくれるとか、樂になるとかといったような一切の功利的な心の動く世界ではない。限りなき暗と光との揚棄された、歓喜と寂との統一された世界であります。

### 阿片

ただ注意しなくてはならないことは、淋しい世界から寂しい世界へと深まつてゆくことを忘れて、何かでおきかえられる淋しさの中に仏の觀念を抱いて慰安場所になっている危険であります。子供を亡くして泣いていた人が、如何にも信心者らしく見えたのが、つぎの子供が生れると、何時のほどにか仏も道も棄ててしまつたとか、未亡人が再婚すると仏がなくなつたとか、こうした場合は宗教はお酒や阿片の役割をしていたので、淋しさに堪えかねて、淋しさをなくすることに、まぎらすことに使われていたのであります。こうした人にとつては、必ずしも仏でなくてもよかつたのです。

喉元すぐれば熱さ忘れる。その時その時の淋しさや苦しさを誤魔化して生きてゆくことは、決して真実に生きることではない。

我等がほんとうに仏の道を聞かしてもらふ時、こうしたごまかしはゆるされぬ。寂の世界に、仏を生きる、絶封自由の大信海は、寂しさの中に開けるのであります。